

鉱山跡に立ちあらわれた鬼の殿堂 日本の鬼の交流博物館

くぼ まさとし
久保正敏 民博文化資源研究センター



正面

この博物館が由良川の支流を遡上した大江町の山中に設立されたのには訳がある。ここは、京都府随一を誇る銅鉱山だった。最盛期には一〇〇〇人の暮らす町だったが、採算が合わなくなり一九七三年にすべて撤去された。丹波地域にあった多くの鉱山が外国産に押され衰退した歴史は、日本の鉱業に共通する。

町おこしのふたつの柱

そこで大江町は、伝説を生かした町おこしを模索し、特集にも登場の村上政市氏を中心に、一九八二年に

大江山酒吞童子祭を開催、当地を「酒吞童子の里」と命名した。もうひとつの柱が鬼瓦。一九八八年、「日本の鬼瓦を保存する会」が発足し、「全国鬼師（鬼瓦製作者）の集い」も開催された。一九九三年の開館時に正面に置かれた高さ五メートルの「平成の大鬼」瓦は、「日本鬼師の会」面々が製作した一三〇のパーツからなり、鬼師団結の象徴だ。

鬼のイメージさまざま

館内はほとんどが露出展示、鬼に関する伝承、仮面、絵巻ともに古今の鬼瓦が時代順に展示され、不定形の鬼のイメージが時代とともに定形化していく様子が面白い。というのも、オニの語源隠（オヌ）は、元来姿の見えないものだったはず、と塩見行雄館長は語る。特別展・企画展も開館翌年から毎年開催し、強い、可哀想、かわいいなどさまざまイメージの絵画や造形作品が展示され、その後博物館に寄贈されて、資料が増えていくという。

鬼研究のメッカ

酒吞童子は謡曲や御伽草紙、浄

瑠璃や歌舞伎、国定教科書や小学唱歌、映画で知られたテーマだが、その根底には、中央権力に抵抗する者などを異界へ押し込める意図があった。そうした善悪二分法では捉えられない鬼のイメージを、民間伝承や民俗芸能も含めて描き出す鬼の殿堂がここ。開館翌年には、人類が鬼に託してきたユーモアとペーソスにふれつつ文化の深層を考える「世界鬼学会」もこの博物館を事務局として設立、毎年秋には芸術家も交えたシンポジウムを開催するなど、鬼研究のメッカでもある。小振りながら懐はじつに深い。



鬼瓦の変遷



老若も集まる鬼の殿堂